賀征討戰記

全

国926
18-10410

明治八年

佐賀征討戰記

陸軍文庫

陸軍少將野津鎮雄

五姿田義松寫

佐賀征討戰記序

佐賀縣亂起。鎮臺兵討而平之。余欲記其本末。以傳於後世。請之陸軍卿。得允。乃囑同僚笠間益三。據公文與雜報。以編此書。予為之序。併論古今兵制。曰。兵制之變。出於時勢之所使然。我邦上世。舉天下皆兵。而天子自為元帥。其制簡而易。及至中世。始倣唐制。京建衛府。國設軍團。猶今日並置近衛鎮臺。其制可謂密矣。既而源頼朝掌兵馬權。變其制。置大番役。以供宿衛。北條氏承其後。更置四

十八籌兵。以鎮京師。至足利氏。大割天下。以封其親黨。自此豪族大姓。割據一方。各異其軍政。鏹倉之舊。不復可見。而矧於王室之制乎。織田豐臣二氏。相繼因沿之。以至德川氏。是豈非出於時勢之所使然乎。及德川氏之末。政漸頹。四方有志之徒。爭起以輔王室。於是戍辰之役作。然兵馬未具。器械未精。號令未嚴。士卒未練。則當時之事。無可足遵守者也。維新以來。朝廷益盛兵備。酌酌軍團制。參取泰西法。置鎮臺者六。曰東京。曰仙臺。曰名古屋。曰大坂。曰廣島。曰熊本。凡六軍。以管全國兵馬。統之於陸軍一省。其制大備。蓋舊制之所不及也。佐賀縣之亂。陸軍省下令熊本及大坂東京三鎮臺。臺兵即日。著甲衣而起。奮前赴難。無一偷安之將。無一怯懦之夫。不出十有五日而奏捷。何其速也。兵馬之具。器械之精。號令之嚴。士卒之練。雖固出於朝廷訓養之有素。而未嘗不由將卒忠勇報國之念深也。三鎮臺既已如此。他日有事。其他臺兵。孰不如此哉。若夫成敗得失。苟鑑之前轍。進退

有據。而莅事必明。讀者有察於此。則此書雖小冊子。亦未必無益於用兵之一端也。

紀元二千五百三十四年十月

陸軍少佐木村信卿撰

例言

一此書戰記ヲ以テ名トス、故ニ專ラ戰鬪ノ狀形ヲ詳カニスレ以テ本旨トス、賊徒捜索捕縛、及ヒ處刑等ノ如キハ、唯其概略ヲ擧クルノミ、

一凡其人ヲ記スル、始メニ官氏名ヲ書シ、餘ハ氏ト官ヲ書ス、始メニ陸軍少將野津鎮雄ト書シ、後皆野津少將ト書スル類是ナリ、

一戰死負傷ハ、唯官軍死傷甚タ多シ等ト畧書シ、附スル一死傷錄ヲ以テ、詳カニ之ヲ載ス、

一此書、本省ノ征討日誌、熊本鎮臺第十一大隊ノ記錄、大坂鎮臺第四第十両大隊ノ記錄、及ヒ野津少將ノ征討日記、廣島鎮臺ノ出兵記ヲ集メ、雜フルニ内務海軍二省ノ征討記ヲ以テシ、要ヲ取リ繁ヲ捨テ、編成セシ者ナリ、敢テ據ル所ナシトシテ增減スルニ非ス、讀者之ヲ領セヨ、

陸軍省出仕笠間益三識

征討出發兵員表

		隊名	將校	下士	兵卒	合計
諸隊	戰ニ關セシ隊	東京鎮臺 第三砲隊	四名	二十一名	百十九名	百四十四名
		大坂鎮臺 第四大隊	十七名	八十四名	四百七十八名	五百七十九名
		大坂鎮臺 第十大隊	十九名	百。一名	五百十一名	六百三十一名
		熊本鎮臺 第十一大隊	二十二名	百二十五名	五百名	六百四十七名
		熊本鎮臺 第十九大隊	二十三名	百。一名	五百五十八名	六百八十二名
	戰ニ關セサル隊	大坂鎮臺 第十八大隊	二十三名	百。三名	五百七十八名	七百。四名
		大坂鎮臺 第七砲隊藥隊	五名	二十一名	百。一名	百二十七名
		廣島鎮臺 第十五大隊ノ一二三中隊	十八名	八十二名	五百九十二名	四百九十二名
樂隊附屬	近衛	第二聯隊	四十一名	二百二十四名	九百。五名	千百七十名
	東京鎮臺	第一第十三大隊ノ内一中隊	五名	二十七名	百四十八名	百八十名
總計			五千三百五十六名			

歩兵士官及砲兵士官

五姓田義松写

費ヤス所ノ彈藥表

山砲		小銃	
榴彈	榴霰彈	スナイトル銃	エンヒル銃
三百三十五發	五十發	十五萬六千百八十五發	十一萬二千〇五十發
合計 四百〇五發	二十發	合計 二十六萬八千二百三十五發	

歩卒及砲卒

五世田義松寫

東京圖書館藏

佐賀征討戰記

陸軍參謀局編輯

明治七年第二月三日、福岡縣ヨリ電報太政官ニ至ル、曰ク佐賀縣士族、征韓論ヲ唱ヘ、寺院ニ嘯集シ、兵器ヲ聚メ、軍備ヲ為シ、勢燄日ニ熾ナリト、四日、太政官陸軍省ニ令シテ曰ク、佐賀縣下、士族動搖ノ報アリ、宜ク近傍鎮臺ノ兵ヲ出タシ、縣官ト商議シ、速ニ之ヲ鎮壓スヘシト、陸軍省乃チ熊本鎮臺ニ令シ兵ヲ出タサシム、是ヨリ先キ、廟堂征韓ノ議アリ、其論二途ニ出ツ、其征韓ヲ主張スルモ

ノハ、相違キナ職ヲ辭ス、參議江藤新平其一人、新平ハ佐賀縣士族ナリ、爾後職ヲ罷メタ猶東京ニ在リ、既ニシテ縣士數輩、佐賀ヨリ至リ、新平ニ說ヲ曰ク、縣內征韓同志ノ者尠カラス、然レドモ先輩之カ唱首タルナシ、君ノ指揮ヲ仰キ、以テ事ヲ定メント欲ス、請フ速ニ歸縣事ヲ執レ、新平曰ク諾ト、即チ潛ニ東京ヲ發シ佐賀ニ至ル、是ニ於テ縣士氣勢頗ル張レリ、初メ縣士ノ此議ヲ唱フルハ、其意ニ謂ヘラク、西方諸縣、必ス同志ノ士アラン、一時雷同、景從、大ニ聲勢ヲ張ラハ、以テ廟堂ノ議ヲ一變スルニ足ラント、而シテ敢テ應スルモノナシ、

七日、太政官又陸軍省ニ令シテ曰ク、嚮ニ佐賀縣士族動搖ニ因リ、鎮臺兵ヲ出タシ鎮壓ヲヘキノ令ヲ下セリ、若シ近隣諸縣ニ波及スルノ勢アラハ、亦臨機ノ處分ヲ以テ、之ヲ鎮壓スヘシ、陸軍省即チ此意ヲ以テ、熊本鎮臺ニ令ス、

九日、電報福岡ヨリ至ル、曰ク佐賀縣征韓黨ハ舊學校ニ據リ、封建黨（封建黨一ニ憂國黨ト云フ）ハ寶琳坊ニ屯ス、兩黨合セテ二千五百人許ト、蓋頑陋ノ徒、尚封

建ノ政治ヲ主張スルモノアリテ、征韓黨ノ起ル
ニ際シ、一時并ヒ起ル者アリ、而シテ江藤新平征
韓黨ノ謀主タリ、既ニシテ同縣士族前ノ秋田縣
令島義勇、東京ヨリ至リ、憂國黨ノ謀主トナル、是
ニ於テ、兩黨ノ勢大ニ振ヒ、此日參議兼内務卿大
久保利通勅シテ、西國ニ赴キ、縣事ヲ處分セシ
ム、委スルニ兇徒捕縛處刑、及ヒ兵馬參謀ノ權ヲ
以テス、尋テ内務大藏司法諸省官員、内務卿隨行
ノ命ヲ奉ス、是ヨリ先キ、海軍省ニ令シテ、官艦東
歸ヲシテ九州ニ赴カシム、海軍秘書官遠武秀行、

命ヲ奉シテ其艦ニ乘リ、此日ヲ以テ品川海ヲ發
ス、
十二日、太政官陸軍省ニ令シテ、東京鎮臺ノ第三
砲隊、大坂鎮臺ノ歩兵二大隊ヲ發シ、熊本鎮臺ニ
赴カシム、
十三日、陸軍少將島尾小彌太ヲ大坂ニ遣シ、陸軍
少將井田讓ヲ廣島ニ遣シ、又陸軍少將野津鎮雄
ニ命シ、鎮臺兵指揮長官トシ、而シテ別ニ陸軍少
將山田顯義ヲシテ西國ニ赴カシム、是ニ於テ、島
尾野津兩少將、先ツ大坂ニ赴ク、是時ニ當リ、賊ノ

両黨、鎮臺兵ノ將ニ縣ニ入ラントスルヲ聞キ、衆議紛々未タ決セス江藤新平衆ニ告ケテ曰ク臺兵入縣スト聞ク、是兵力ヲ以テ我黨ヲ抑壓セントスルナリ、今若シ戰ハスンハ、猶白刃ヲ吾頭ニ加ヘラレ、之ヲ拒マス、手ヲ束テ死ヲ待ツカ如シ、如キス寧ロ我先ツ之ヲ制セント、是ニ於テ、衆議一決シ、戰ニ決スルノ議案ヲ作リ、之ヲ縣内ニ告ケ、諸道ノ防戰ヲ議ス、此日、海軍省ニ令シ、東艦雲揚艦ヲシテ往キテ九州ヲ鎮撫セシム、凡事皆大久保内務卿ノ指揮ヲ受ケシム、是時、東艦ハ既ニ發シテ下田港ニアリ、海軍大佐林清康、命ヲ奉シテ九州ニ赴ク、

十四日、佐賀縣權令岩村高俊、熊本鎮臺兵ト、海陸両路ヨリ進ミテ佐賀ニ向ヒ、午後六時、両兵船ノ中、乃母姉筑後河ノ海口ニ至ル、潮候正ニ涸レタリ、錨ヲ下シテ停泊シ、陸路ヨリ發セル者ハ、高橋驛ニ次シテ、使ヲ日田分營ニ遣シ、出兵ノ令ヲ傳フ、初メ、出兵ノ令熊本鎮臺ニ至ル、適、岩村權令東京ニ在リテ任ヲ奉シ、未タ赴カス、參事森長義獨リ縣事ニ任ス、然レトモ大屬以下ノ縣官、大抵佐賀

縣ノ貫屬ニシテ、皆黨論ニ與セシモノナリ、長義力能ク制スヘカラサルヲ以テ、出テ、小倉ニアリ、以テ權令ノ來ルヲ待テリ、權令東京ヲ發スルニ臨ミ、奏シ請フテ曰ク、臣管下、士族嘯集ノ報ヲ聞ク、臣恐懼ニ堪ヘス、願ハ速ニ往キテ其事由ヲ糺訊シ、其論スル所朝旨ニ悖戻シ、人心ヲ煽動スルアラハ、臨機ノ計ヲ以テ、其巨魁ヲ縛セン、如シ然ラスシテ、衆ヲ要シ上京建言セントスルコトヲ謀ラハ、斷然之ヲ制止セン、苟モ暴舉既ニ顯ルヽニ至テハ、已ムヲ得ス、管下士族ヲ編制シ、兵力ヲ以テ之ヲ鎮壓セント、朝議之ヲ許ス、船長門赤馬關ヲ過ルニ及ヒテ、權令上陸シテ參事ニ會ス、參事具ニ事由ヲ陳ス、權令即チ參事ヲシテ山口縣ニ赴キ、事ヲ謀ラシメ、躬ラ熊本鎮臺ニ至ル、熊本鎮臺出兵ノ命ヲ受クルニ當リ、議シテ曰ク、臺兵二大隊、其一中隊ハ、嘗テ對馬ニ分遣シ、其一小隊ハ、日田分營ニアリ、餘ス所ハ一大隊半ニ過キス、今其半大隊ヲ以テ臺ヲ守ラシメハ、出戰スルモノ僅ニ一大隊ノミ、若シ、急遽出戰一旦蹉跌ヲ取ルコトアラハ、近隣諸縣ノ兩端ヲ持スルモノ、必ス

勢ニ乘シテ蔓延蜂起シ、遂ニ後圖ヲ為シ難キニ至ラン、如カス急ニ使ヲ東京ニ遣シ、軍艦及歩砲兵ヲ發センコトヲ請ヒ、其来ルヲ待チテ力ヲ併セ一舉シテ之ヲ鎮壓セン、ニハト、乃チ陸軍中佐中村重遠ヲシテ東京ニ赴カシム、而シテ本臺警備益、嚴ナリ、既ニシテ權令熊本ニ至リ、護衛ノ兵ヲ出サンコトヲ請フニ及ヒ、又議シテ謂ヘラク、嚮キニ出兵ノ命ヲ奉シ、令又權令ノ請ヲ受ク、義已ムヘカラスト、即チ出兵ノ議ヲ決シ、歩兵第十一大隊ヲ分チ、左右二隊トス、右半大隊ヲ陸路ヨリ進マシム、陸軍大尉山代清三隊長タリ、陸軍中尉石川輔依、殿井隆興、永山貞應、高橋種生、陸軍少尉今田唯一、隈岡長道、本田宗七、陸軍曹長一名、同軍曹十七名、伍長兵卒合セテ二百九十名、総計三百十六名、而シテ陸軍少佐佐久間左馬太之カ參謀タリ、陸軍大尉安田宗直之ニ属ス、左半大隊ヲ海路ヨリ進マシム、陸軍大尉和田勇馬隊長タリ、陸軍大尉大池蠖二、奥保鞏、山脇錆太郎、陸軍中尉澤田正武、津井城卿吉、天野繼吉、中島護、陸軍少尉西島助義、三木一、小林清吉、陸軍曹長三名、同軍曹

二十四名、伍長兵卒合セテ二百九十四名、總計三百三十二名、而シテ陸軍少佐山川浩之カ參謀タリ、兩隊合セテ六百四十八人、其他兩隊ニ屬スル、裁判會計武庫軍医各部、合セテ八名、而シテ權令岩村高俊、左半大隊ト俱ニ海路ヨリ進ム、陸路ヨリスル者ハ、路ヲ高瀬三池ニ取リ、柳河ニ進ム、海路ヨリスル者ハ白川縣廻漕會社ノ蒸氣船、乃母歸舞鶴歸二隻ニ分チ乘ル、皆高橋港ヨリ發セシ、乃母船獨リ是日ヲ以テ此ニ至レルナリ、此日大久保内務卿、山田井田両少將、及ヒ諸省各官東京ヲ發シ、北海艦ニ乘シ、午後五時、錨ヲ横濱港ニ開ラキ、海軍少秘書足達長卿、海軍中尉牧義甫等モ、亦雲揚艦ニ乘リテ、品川海ヲ發ス、又海軍省ニ令シテ、海兵二小隊砲兵半坐、大坂艦ニ乘リ長崎ニ赴カシム、

十五日、午前八時、舞鶴船高橋港ヲ發ス、而シテ、乃母船ハ午前十一時、抜錨シテ早津江ニ至リ、上陸ス、此地、佐賀城ヲ距ルコト一里餘、和田大尉乃チ書ヲ佐賀縣廳ニ贈リ、報シテ曰ク、臺兵權令ヲ護衛シテ、入縣スト、午後一時佐賀城ニ入ル縣吏命

シテ糧食ヲ備ヘシム、應スル者ナシ、午後八時、舞鶴船早津江ニ至リテ上陸シ、夜十二時亦佐賀城ニ入ル、佐賀縣士族前山精一郎、夜使ヲ城中ニ遣シテ曰ク、賊徒今夜城ヲ襲フノ議アリ、速ニ備フ設ケヨト、城中戒嚴ス、初メ、征韓憂國兩黨ノ起ル、之ニ與セサルモノアリテ別ニ保護黨ト號シ、精一郎之カ帥メリ、兩黨ノ朝旨ヲ蔑如シ、人民ヲ誘惑スルヲ憂ヒ、卓然義ヲ守リ、兩黨ヲ制服セントヲ欲ス、然レトモ兩黨ノ氣燄益〻熾ニシテ、之ヲ鎮スルコト能ハス、避ケテ諸冨ニ在リ、此ニ至リ、間

謀ヲ出メシ夜襲ノ謀ヲ探リ得テ、以テ城中ニ報ス、此日臺兵ヲ送ル所ノ乃毋船、直ニ纜ヲ解キ遁ル、舞鶴船ハ、潮候悪シトヲ以テ未タ纜ヲ解カス、遂ニ賊徒ノ獲ル所ト為レリ、右半大隊、此晨將ニ高瀬驛ヲ發セントスルニ當リテ、安田大尉、左半大隊ニ議スルコトアリテ、先ツ發シ十里ニシテ若津ニ至リ、其既ニ城ニ入ルヲ聞キ、進ミテ筑後河ヲ渡ラントス、河上ニ伏兵アルヲ見ル、乃チ遽ニ服ヲ改メ、岸ニ登リ、佯リテ三潴縣士族ト稱ス、賊其佯リナルヲ覺ヘス、敢テ禁呵スル者ナシ、既

ニシテ賊ノ斥兵ニ遇フ、兵中ニ中山某ナル者アリ、嘗テ鎮臺ニアリテ軍曹ニ任ス、故ヲ以テ大尉ヲ識レリ、大尉欺キテ曰ク、僕嘗ニ官ヲ罷ム、今將ニ縣ニ歸ラントス、唯此地ノ景況ヲ觀ンコトヲ欲ス、路ヲ迂ニシテ此ニ至レリト、某之ヲ信ス、斥兵復詰ラス、遂ニ城ニ入ルヲ得タリ、是時午後十一時ナリ、右半大隊ハ、高瀬驛ヲ發シテ三池驛ニ陣ス午後七時精一郎、又人ヲ石川永山兩中尉ノ處ニ致シ、賊黨ノ將ニ兵端ヲ開カントスルノ狀ヲ報ス、永山中尉乃チ佐賀ニ赴キ、其虛實ヲ偵ス、

是日東京ニ於テ、海軍秘書官唯武連、海軍大尉青木住眞、但馬惟賢、德田盛芳等大坂艦ニ乘リ、品川海ヲ發ス、

十六日、黎明、賊兵四面ニ、城ヲ圍ミ砲擊ス、臺兵拒キ戰フ、然レトモ、城中獨リ步兵銃隊ノミニシテ、大砲ノ備ナシ、是ヲ以テ、頗ル防禦ニ苦シム、因リテ議シテ曰ク、寨ロ圍ヲ突キ出テ、戰ハント、午前七時、奥大尉二分隊ヲ帥ヰ、北門ヲ開キテ突出ス、外郭ノ西北隅ニ武庫アリ、賊樓上ニ據リ、小銃ヲ亂射ス、奥大尉左腕ヲ傷ク、勇ヲ奮フテ進ム、

銃丸復其胸ヲ洞シ、創重ケシテ進ム能ハス、是ニ於テ、城中警備兵ヲ除クノ外、悉ク出テ、突戰ス、賊兵避易シ、官軍進ミテ賊營ヲ奪フ、賊一人銃ヲ投シ、刀ヲ拔キテ鬪フ、軍曹石原矢之助銃鎗ヲ以テ之ト戰フ、面ヲ傷ケラレテ仆ル、賊其背ニ跨リ、將ニ之ヲ刎ラントス、西島少尉馳至リ、刀ヲ以テ賊ヲ斬ル、又一賊刀ヲ揮ヒ來ル、伍長澁谷勘太郎、銃鎗ヲ以テ其胸ヲ洞シ、之ヲ斃ス、其他斬獲頗ル多シ、遂ニ武庫及ヒ諸邸ヲ燒ク、賊數十人ヲ殺シ、米穀及ヒ小銃彈藥ヲ取リ、兵ヲ收メテ城ニ入ル、

是戰、山川少佐、大池大尉、重創ヲ被ル、大尉尋ヲ死ス、其他、下士兵卒、死スル者三人、傷ク者五人、是夜賊兵、城後及ヒ左右ヨリ、砲擊曉ニ徹ス、右半大隊ハ、曉三池ヲ發シ、中島川ニ至レハ、永山中尉ノ馳歸ルニ遇ヘリ、中尉ノ佐賀ニ赴ク、往キテ未メ筑後河ヲ渡ラサルニ、遙ニ佐賀城ノ砲聲雷ノ如キヲ聞ク、即チ急ニ歸リ報スルナリ、因リテ中尉ヲシテ狀ヲ熊本ニ歸リ報セシメ、進ミテ瀨高驛ニ軍ス、前山猜一郎、此日ノ戰ニ、官軍半大隊、佐賀城ニ臧キメントヲ聞キ、陸路ノ半大隊ニ合セントヲ欲

シ、其部下ヲ率ヰ、馳ヲ瀬高ニ至リ、陣前ニ來リ謁シテ曰ク、僕征韓憂國兩黨ノ間ニ立チ說論百端、竟ニ納ラレズ、以テ今日ニ至レリ、實ニ恐懼ニ堪ヘズ、敢テ請フ天兵ニ屬シ、逆賊ヲ討セント、衆議謂フ、彼正義ヲ以テ名トスト雖モ、部下皆佐賀ノ士族タレハ、其情固ヨリ測リ難シ、未タ請ヲ許スヘカラス、且我兵彈藥、人每ニ八十發ニ過ス、左半大隊方ニ圍城中ニアリ、然レトモ、道路梗塞赴キ援ヘカラス、宜ク軍ヲ府中ニ移シ、水臺彈藥ヲ輸スルヲ待チ、筑後河ノ上流ヲ渡リ、進ミ戰フヘシ

其間ニハ前山隊ノ情實モ、亦以テ詳ニスルヲ得ルヘシト、午後五時軍ヲ府中ニ移シ、人ヲ日田ニ馳セテ、米穀百五十石ヲ買ハシム、是日、北海艦神戸港ニ入ル、大久保内務卿、及山田井田兩少將、大坂ニ至ル、

十七日、賊兵砲擊未タ已マス、時ニ城中糧食既ニ竭キ、飢渴旦夕ニアリト雖モ、固守以テ右半大隊ノ援ヲ待ツ、大坂鎮臺是日ヲ以テ第四第十兩大隊ヲ發ス、第四大隊ハ陸軍少佐厚東武直隊長タリ、陸軍大尉兒玉軍太、田村寛一、原熙政、瀧本美輝、

陸軍中尉南小四郎、西島敏、上利勝世、後藤常伴、宮崎政光、陸軍少尉岡村捨、中村巨訓、田邊良成、石島壽平、松田憲信、佐々木養次郎、大供太郎、軍医副太平周禎、同補北村正存、西川為三、陸軍曹長五名、同軍曹三十一名、伍長四十八名、兵卒四百八十名、總計五百八十二人、第十大隊ハ、陸軍少佐茨木惟昭隊長ヽリ、陸軍大尉石川敬儀、小笠原義從、青山朗、阿部正通、陸軍中尉佐藤誠道、林陸夫、伴親光、難波宗明、森周貞、三浦義精、陸軍少尉月岡才藏、加藤有行、中村芳彦、岸和田清永、岡千仞、大橋清直、宇都宮九、竹内政明、軍医副小島政憲、同補中司俊哉、同附屬一名、陸軍曹長五名、同軍曹三十五名、伍長六十一名、兵卒五百十一名、總計六百三十四人、第三砲隊ハ前三日ヲ以テ東京ヲ發ス、陸軍大尉山嵜成高隊長ヽリ、陸軍大尉大崎長寛、陸軍中尉中井應義、今津孝則、軍医副長瀬時衡、同附屬一名、馬医二名、陸軍曹長、火工長、各一名、同軍曹九名、伍長十名、兵卒百十九名、總計百四十八人、歩砲三隊、合セテ一千三百六十四人、野津少將總ヲ之ニ將ヽリ、陸軍少佐渡邊央ヲ參謀トシ、陸軍大尉東郷直一ヲ

傳令使トシ、陸軍大尉兒玉源太郎、傳令使兼書記タリ、其他陸軍會計官八名、隊外軍医四名、武庫司官三名、及ヒ隊外尉官六名、皆野津少將ニ屬ス、乃チ第四第十両大隊ヲ、鍋兵場ニ整列シ、大坂鎮臺司令長官陸軍少將四條隆謌、野津少將ヲ導キテ其前ニ至ル、両大隊齊シク敬禮ヲ行フ、四條少將大隊長ニ令シテ曰ク、今ヨリ士官兵卒ヲ論セス、軍中ノ事大小トナク、一ニ野津少將ノ令ニ從フヘシト、大隊長之ヲ受ケテ、部下ノ士卒ニ傳フ、畢リテ即チ發ス、大久保内務卿、山田少將、野津少將、及ヒ第四大隊ハ、米國ノ新約克艦ニ乘リ、渡邊少佐、及ヒ第十大隊ハ、北海艦ニ乘リ、其他隊外諸官皆分チテ両艦ニ乘リ、安治川口ヲ發ス、二艦ノ將ニ港ヲ發セントスルニ及ヒテ、第三砲隊、猶龍艦ニ乘リテ東京ヨリ至リ、俱ニ西博多ニ向ヒテ發ス、

十八日、賊兵四面砲擊益急ナリ、而シテ右半大隊未タ至ラス城中大ニ苦シム、因リテ相議シテ曰ク、糧食既ニ竭キ、彈藥將ニ盡キントス、而シテ久シク圍城中ニアルハ、坐ナカラ斃ルヽヲ待ツノ

ミ、如カス圍ヲ潰シ突出シ、右半隊ト合シ、然ル後再舉ヲ圖ラレニハト、乃チ半大隊ヲ分チテ三トシ、其一小隊ヲ以テ先鋒トシ、山脇大尉、西島少尉等之ヲ率サ、其一中隊之ニ次ク、津井城中尉、天野中尉、三木少尉、分チテ之ヲ率サ、山川少佐以下、士卒創痍ヲ被ル者、及ヒ岩村權令ヲ其中ニ擁シ、和田大尉、澤田中尉、小林少尉等之ニ屬ス、最後ノ一隊ハ、安田大尉、中島中尉、之ヲ率サ、下士兵卒從僕等之ニ屬ス、部署已ニ畢リ午前七時三十分、城ノ後門ヲ開キ、死ヲ冒シテ突出ス、賊城ヲ圍ムコト累日、城外多ク砲臺ヲ起シ、攻具頗ル備ハル、官軍ノ出ツルヲ見テ、之ヲ要擊シ、銃砲交發シ、飛丸雨ノ如シ、前隊山脇大尉、西島少尉、石崎曹長、及ヒ中隊ノ先鋒津井城中尉等、兵卒ヲ勵シ、且戰ヒ且走リ、蓮池官道ヨリ諸冨ニ出ントス、賊勝ニ乘シ、尾擊益急ナリ、官軍走リテ未タ諸冨ニ至ラス、路ニ一分隊ノ兵ヲ見ル、官軍嚮キニ前山隊ノ諸冨ニアルト聞キ、問フテ曰ク、前山隊ニ非ツルカト、賊佯リ答ヘテ曰ク然リ、官軍因リテ嚮導ヲ命ス、賊佯リ誘キ、之ヲ伏中ニ陷ラシメ、四面ヨリ

圍ミ擊ツ、官兵苦戰僅ニ圍ヲ脫シテ筑後河ニ至ル、渡ヲ爭ヒ溺死スル者數ヲ知ラス、泅ヲ善クスル者ハ、游泳シテ遁ル、賊岸上ヨリ銃ヲ發シ、戎ハ舟ヲ以テ尾擊ス、官軍死傷甚多シ、津井城中尉免シサルヲ知ル、洲上ニ至リテ自殺ス、山脇大尉以下、殘兵ヲ以テ走ル、其他死傷畧盡ク、西島少尉、殘兵二十余人ヲ帥サテ後ヘニヨリ、亦途ニシテ遥ニ兵卒一群ヲ見ル、旗ヲ揮フテ呼ヒテ曰ク前山隊ニ非サルカト、賊佯ルコト前ノ如シ、乃チ前導ヲシメテ、將ニ諸冨ニ至ラントス賊遽ニ前後

ヨリ夾ミ擊ツ、二十余人殊死シテ戰ヒ、河ニ沿フテ走ル、又賊ノ伏中ニ陷ル、賊四面ヨリ圍ミ擊ツ、二十余人走リテ民舍ニ入ル、西島少尉以為ヘラク事既ニ此ニ至レリ、賊ノ手ニ死センヨリハ、屠腹スルニ如カス、宜シク先ツ創ヲ被リ自盡スル能ハサル者ヲ刎テ、然ル後自殺セント、手自ラ三名ヲ刎ス、石崎曹長洋刀ヲ以テ自刺ス、入ラス、短銃ヲ以テ胸ヲ洞シテ死ス、自殺スル者十二名、西島少尉、將ニ自殺セントス、衆皆之ヲ留メテ曰ク、足下先ツ死セヘ、濡忍苟免ノ心ヲ懷ク者、終ニ自

盡スルコト能ハサクン、我輩盡ク死スルヲ待チ、而シテ後從容死ニ就クモ、未タ晩シトスヘカラスト、會賊石井某、一小隊ヲ率ヰ來リ、大ニ呼ヒテ曰ク、汝等何ヲ爲サントス、死ハ應ニ其時アルヘキナリ、今既ニ我圍中ニアリ、何ヲ從容縛ニ就キ、時ヲ俟タヤヤト、西島少尉曰ク、我豎駑ト雖ヒ、武ヲ以テ國ニ事ヘ、今又罪ヲ行間ニ待ツ、死ハ固ヨリ其分ナリト、獨リ率ヰル所ノ兵卒ヲシテ、縛ニ就カシメ自殺セシコトヲ欲ス、衆聽カス、俱共ニ死セントヲ請フ、少尉已ムヲ得ス、乃チ衆ト俱ニ縛ニ就ク、津井城中尉、率ヰタル所ノ中隊ノ其一小隊、傷者及ヒ縣官、軍医等ハ、賊ニ要擊セラレテ、各自ニ身ヲ挺テ逸走ス、賊尾擊益急ナリ、大池大尉以下伏屍枕藉、隊伍擾亂ス、其一隊ハ、安田大尉ノ率ヰル所ノモノト合シ、且戰ヒ且走リ、蓮池ニ至リ、分チテ二隊トナシ、一隊ハ山川少佐、和田大尉、天野中尉、中島中尉、小林少尉、及ヒ岩村權令、其他、曹長、軍曹、伍長、兵卒、九十余人、行、賊ノ追擊ヲ拒キ、道ノ海島ニ取リ、筑後河ノ上流ヲ渡リテ、午後四時、府中ニ至ル、此隊兵卒、戰死スル者二名、一隊

ハ安田大尉、三木少尉、愛甲軍医、其他、軍曹、伍長、兵卒、九十余人、傷者奥大尉等ヲ護シテ、蓮池ニ走リ、賊ノ斥兵二人ヲ捕ヘテ、安田大尉之ヲ斬ル、遂ニ境原ヨリ姉村ヲ経テ直島村ニ出ツ、一小河アリ、東岸ニ賊旗ノ見ル、三木少尉、兵卒三十人ヲ率サテ、上流ヲ渡リ横サマニ賊ヲ衝キ、安田大尉、餘兵ヲ以テ本道ヨリ進ム、既ニシテ、追兵又大ニ至ル、官軍死ヲ冒シテ拒キ闘ヒ、賊圍ヲ衝キテ、六田江見村ヲ過キ、将ニ筑後河ニ至ラントス、三番中隊ノ兵卒谷村計介、進ミテ曰ク、官兵地理ヲ諳セス、故ヲ以テ屢賊ノ尾撃ニ遇ヒ、以テ此ニ至レリ、意フニ、住吉津ヲ距ルコト必ス遠カラス、願ハクハ僕獨行シテ河津ニ至リ、舟ヲ艤レテ以テ待タン、若シ沿途ニ賊アラハ、必ス僕ヲ銃撃セン、諸君若シ銃聲ヲ聞カハ、更ニ他道ヲ取レ、否サレハ則チ僕舟ヲ艤シテ諸君ヲ待ツヲ得ン、僕一死以テ諸君ノ為ニ嚮導タラント、衆皆感歎之ヲ遣ル、計介進ミテ河津ニ至レハ、賊兵ナシ、乃チ舟ヲ艤レテ以テ待ツ、是ニ於テ、安田大尉、奥大尉以下皆河ヲ渡ルヲ得テ、府中ニ達ス、此隊戰死スル者二十餘

人、夜ニ及ヒテ、殘兵府中ノ軍ニ至ルモノ、陸續相
踵ヒ、城中開戰ヨリ此ニ至リ、左半大隊、人員三分
ノ一ヲ亡ヒ、賊ノ死傷モ亦頗ル多シ、是日、陸軍大
尉小島政利、陸軍中尉竹垣利義、陸軍少尉五島顯
忠、松山宣重、日田分營ノ歩兵第十九大隊ノ三番
小隊ヲ率ヰテ、亦府中ノ軍ニ至ル
十九日、午前十一時、新約克艦博多港ニ入ル、大久
保内務卿、山田少將、其他、文武官員、及ヒ野津少將
大坂鎮臺第四大隊、盡ク上陸シ、本陣ヲ博多中島
ニ置ク、乃チ反賊征討ノ令ヲ各縣ニ布ク、而シテ

福岡小倉二縣ニ令シ、其管下士民ヲ精撰シ、各自
ニ編隊セシム、是日、東京ニ於テ、佐賀征討ノ詔下
ル、太政官令シテ曰ク、佐賀縣下嘯集ノ賊徒本月
十五日夜、縣廳ヲ襲擊シ、鎮臺兵ト鬪爭セシノ報
アリ、因リテ征討ノ命ス、夜十一時、猶龍艦入港
ス第三砲隊上陸シテ、亦博多ニ陣ス
二十日、午前第十時、北海艦入港シ、第十大隊上陸
シテ、亦博多ニ陣ス、佐久間少佐府中ノ陣ヨリ至
リ、佐賀城ノ戰狀ヲ具陳ス、是ニ於テ將佐ヲ會シ、
軍事ヲ議ス、此時ニ當リテ、賊肥筑ノ國境、田代、三

瀬、推原口等ニ分屯セリ、因リテ第四第十両大隊、及ヒ第三砲隊ハ、二日市驛ヨリ進ミテ田代朝日山ニ向ヒ進擊セシメ、第十一大隊ハ、便道ヨリ直ニ千栗及ヒ豆津ノ賊ヲ擊チテ、朝日山ニ會セシハ、第十大隊ノ第三中隊ハ、博多ニ留マリ、本陣ノ警護スヘシト、議既ニ決シ、佐久間少佐府中ノ陣ニ歸ル、午後第六時野津少將歩兵二大隊砲兵一隊ヲ總率シテ博多ヲ發シ、二日市ニ進ム、夜雨冥濛、官軍警備ヲ嚴ニシ、賊ノ襲擊ヲ戒ム、

二十一日、午前二時二日市驛ニ至ル、哨兵篝火ヲ設ケ、盜、警備ヲ嚴ニシ、而シテ一小隊ヲ派遣シ、斥候トシ、原田驛ニ至ラシム、午前六時總軍二日市驛ヲ發ス、第十大隊、及ヒ砲隊ハ、本道ヨリ進ミ、第四大隊ハ分レテ二隊トナリ、萩原村、及ヒ平等寺越ヨリ進ミ、皆田代驛ニ達ス、驛中事ノ起ラントスルヲ察シ、皆荷擔奔竄ス、官軍ノ未タ此ニ至ラサル、賊數百人驛中ニ屯在セリ、官軍ノ進擊ヲ聞キ、昧爽佐賀ニ走ル、驛ハ舊ト宗氏ノ封地ニ係ル、故ニ舊藩士此ニ住スル者數十戸アリ、賊威ノ熾ナルニ當リテ、已ムヲ得スシテ陽リ從ヘリ、此ニ

至リテ皆来リ降ル因リテ其罪ヲ赦シ、適宜ノ使役ニ充ツ、是夜、全軍田代驛ニ宿ス、哨兵ヲ嚴ニシ、斥候ヲ近傍ニ出タシ府中ノ第十一大隊ハ、正午十二時ヲ以テ發ス、是ヨリ先キ、前山精一郎、官兵ニ從ヒ賊ヲ討センコトヲ請ヒ、部下三名ヲ質トシ、退キテ柳川ニアリ、此ニ至リ、衆ヲ諭シテ曰ク、我輩力ヲ竭シ、両黨ノ間ニアリテ、和解ヲ謀リ、事協ハスシテ、遂ニ今日ニ至リ、進退措ク所ナシ、諸君ノ知ル所ノ如シ、然レトモ、叛賊ト為リ官軍ニ抗スルニ忍ビス、故ニ斷然官軍ノ先鋒トナリ、逆徒ヲ討セントス、諸君既ニ意ヲ決シテ我ニ從フ、然レトモ強テ諸君ヲ要スルヲ欲セス、各好ム所ニ隨フニ如カスト、是ニ於テ、部下辭シ去ル者、百餘人、一人アリテ曰ク、若官軍ニ屬スルトキハ、舊主墳墓ノ地ニ向ヒテ砲ヲ發セサル可カラス、又官軍ニ屬セサルトキハ、叛賊タルヲ免レス、二ノ者皆忍ヒサル所ナリ、進退維谷マレリ、死スルニ如カスト、遂ニ自刎シテ死ス、精一郎ハ衆ヲ率キ復府中ノ軍ニ來リ、官軍ニ從ハンコトヲ請フ、佐久間少佐之ヲ聽ス、是ニ於テ、精一郎筑後ノ羽犬塚

驛ニ在リ、賊ノ間諜數人ヲ捕ヘテ、之ヲ斬ル、府中ノ官兵始メテ前山隊ノ他志ナキヲ信シ、其部下五名ヲ以テ、右半大隊ノ嚮導ヲ為ラシム、右半大隊、大隊長和田大尉、中隊長山代大尉中隊長石川中尉、及ヒ高橋中尉、殿井中尉、永山中尉、今田少尉、本田少尉等、熊代津ヨリ河ヲ渡リ、宮地村ニ軍ス、佐久間少佐、左半大隊、及第十九大隊ノ三番小隊ヲ率ヰ、進ミテ瀬ノ下ニ軍ス、中隊長小島大尉、及ヒ天野中尉、竹垣中尉、三木少尉五島少尉、松山少尉、小林少尉、其他武庫會計等諸官皆之ニ屬ス、左右

隊相約シテ曰ク、右ハ宮地ヨリ河ニ循ヒ進入シ、朝日山ノ砲聲ヲ聞カハ、直ニ進ミテ千栗豆津ノ賊ヲ擊ツヘシ、左ハ其報ヲ待チテ、速ニ河ヲ濟リ、豆津ニ會スヘシト、

二十二日、田代ノ官軍、將ニ朝日山ノ賊ヲ擊ントス第四大隊、及ヒ砲隊ハ、夷木道ヨリ進ム、第十大隊ヲ分チテ二隊トシ、一ハ宿村ヲ經テ、夷木驛ノ左側ヨリ朝日山ニ向ハシメ、一ハ其右ヲ取リ、古賀・牛原・山浦村等ヲ經テ、朝日山ノ背ニ出テシム、部署已ニ畢リ、午前六時、田代驛ヲ發ス、夷木驛

ニ至リ、賊ノ斥候ニ遇フ、擊チ之ヲ走ラス、漸ク進ミテ、朝日山ノ麓ニ至ル、賊砲墩ヲ築キ、險ニ據リテ防戰ス、第四大隊、直ニ撤兵ヲ布キ、之ヲ擊チ、砲隊ハ砲二門ヲ以テ連射セリ、賊モ亦銃砲并ヒ發シ、勢頗ル振フ、第十大隊、行、賊ヲ破リ、其半大隊ハ、山浦ノ間道ヨリ、賊ノ側面ヲ衝キ、其半大隊ハ、宿村ノ間道ヨリ、其後面ヲ襲フ、然レトモ、賊力ヲ極メテ、四面猛擊、官軍殆ト挫折セントス隊長士卒ヲ勵マシ、叱咤奮戰シ、兩軍ノ砲聲雷ノ如ク、山岳為ニ震フ、賊兵終ニ支フル能ハス、火ヲ民家ニ放

ナテ走ル、官軍追フテ中原驛ニ及フ、賊又反シ戰フ、官軍再ヒ擊チテ之ヲ走ラス、中原驛外原野ノ間ニ一ノ阻隘ノ處アリ切通ト稱ス、賊此ニ據リ防戰ス、時ニ官軍ハ、獨リ第四大隊ノ一中隊ノミ之ニ當リ、其他皆分レテ諸口ニ進ム、故ヲ以テ其戰頗ル苦シム、既ニシテ、諸口ノ官軍皆來會シ、力ヲ併セ、疾ク擊チ之ヲ破リ、尾擊一里、小彈銃藥ヲ獲テ還ル、是日、朝夕兩次ノ戰、皆勝チタルヲ以テ、官軍大ニ振フ、夜中原驛ニ次シ、哨兵ヲ諸要地ニ分配ス、夜半賊來リ襲フ、又擊チ之ヲ走ラシ、追

フテ、寒水村ニ至リテ還ル、此夜、前山精一郎、其隊百餘名ヲ帥ヰ、中原ノ陣ニ来リテ官軍ニ合ス、因リテ其兵ヲ各隊ニ分配シ、以テ嚮導トス、是日府中ノ官軍、第十一大隊ノ右半大隊ハ、午前六時ヲ以テ宮地渡ヲ踰エ、筑後河ニ沿フテ下ル、路果シテ遥ニ朝日山ノ砲聲ヲ聞ク、衆大ニ奮ヒ、直ニ千栗及ヒ豆津ニ進ム、賊要害ニ據リテ拒守ス、我軍即チ撤兵ヲ以テ接戦ス、左半大隊モ亦瀬ノ下ヨリ河ヲ渡リ、右半大隊ト合シカヲ戮セテ奮戦ス、一時間ニシテ、賊退キ走ル、山代大尉、高橋中尉、兵二十人ヲ揀ヒテ尾擊シ、進ミテ苫野ニ至ル、賊ヲ見ス、乃チ退キテ本隊ニ合セントス、日暮レ路ヲ辨セス、遂ニ西尾村ニ至リ、石川中尉ニ會ス、中尉初メ今田少尉ト同シク、豆津ヨリ西尾ニ進ミ、行〻賊兵ヲ破リテ將ニ苫野村ニ出ントス、途ニ第四大隊ノ一分隊ニ遇ヒ、共ニ進ミテ苫野ニ至ル、既ニシテ、一分隊ハ其本隊ノ中原驛ニ在ヲ聞キ、還リ合シ、山代石川両尉、留リテ苫野ニ在リ、第十一大隊ハ、既ニ賊ヲ豆津ニ破リテ兵ヲ收メントス、山代石川両尉、率ヰル所ノ兵皆在クサルヲ以

テ、餘兵ヲ合シテ、江見村ニ進ム、賊兵六田村ニアリテ、哨兵ヲ江見ニ出メタリ、午後四時、小島大尉一小隊ヲ以テ之ヲ擊チ、勝タス、是時前山隊既ニ往古ヨリ河ヲ渡リテ市場村ノ賊ヲ破リ、進ミテ江見ニ至リ、第十一大隊ニ合シ、全軍齊シク進ミテ、六田ノ賊ヲ擊ツ、賊伴リ退ク、乃チ一中隊ヲ以テ、六田ヲ守リ、全隊ハ、退キテ江見ニ次ス、六田ノ中隊、又二分隊ヲ派シテ斥候セシム、賊兵突然大ニ至ル、斥兵歸リ報ス、即チ中隊ヲ以テ逆ヘ戰フ衆寡敵セス、永山大尉之ニ死シ、本田少尉重創ヲ

被ル、其他死傷甚タ多シ、遂ニ退キテ江見ノ軍ニ入ル、賊兵勝ニ乘シテ奮進ス、和田大尉部兵ヲ勵マシ迎ヘ戰フ、殿井中尉、一中隊ヲ以テ横ヨリマニ賊ヲ衝ク、賊屈セス、勇ヲ鼓シテ叢進ス、官軍大ニ苦シム、小島大尉、一小隊ヲ以テ來リ援ヒ、半隊ヲ以テ正面ヲ攻メ、分隊ハ樹林ニ藏ハレテ、賊ヲ横擊シ、勝敗未タ決セス、天野中尉、三木少尉、二小隊ヲ率ヰ六田川ヲ渡リ、撤兵ヲ以テ、賊ヲ狙擊ス、賊積蒿ニ葬ヒ、樹林ニ伏シ、三面齊シク大小銃ヲ亂發ス、官軍竟ニ敗レ、午後六時筑後河ヲ渡リ、退キ

ヲ住吉ニ軍ス、賊之ヲ追ヒ河ニ及フ、官軍夜陣ヲ千栗ニ轉シテ、山代石川両尉ニ合ス、前山隊ヲ以ヲ殿トス、是夜千栗ニ舍ス、此地中原驛ヲ距ルコト一里餘、両道ノ官軍、未タ合スルコト能ハス、是ヨリ先キ、中村中佐ノ東京ニ赴クヤ、大坂ニ至リ、東京大坂二鎮ノ兵既ニ出タルニ會ス、因リテ後東京ニ赴カスシテ歸ル、此日千栗ノ軍ニ至ル、此日東艦雲揚艦、博多港ニ入リ、大坂艦長嵩ニ入ル二十三日、第十大隊ヲ分チ中隊トシ、以テ前軍トナシ、第三砲隊之ニ次ク、第四大隊ヲ以テ後軍ト

シ、前山隊ヲシテ留守セシメ、午前七時、中原驛ヲ發シ、第十大隊、本道ヨリ進ミ、寒水村ニ至ル、賊伏ヲ設ケテ左右ヨリ夾ミ擊ツ、官軍ノ前隊安良河ヲ渉リテ進ム、賊要地ヲ占メ、民舍擄田ニ出没シ、以テ官軍ノ後隊ヲ猛擊ス、隊長茨木少佐、部兵ヲ勵マシテ奮戰ス、砲隊亦勢ヲ合セ、狙擊太タ急ナリ、賊屈セス、益進ミテ砲隊ノ側面ヲ亂射ス、彈丸雨注、官軍大ニ傷キ、逡巡進ム能ハス、佐々木少尉半小隊ヲ率ヰ、潛進シテ賊ノ右翼ヲ衝ク、破ルコト能ハス、両軍交戰時ヲ移シ、賊勢愈熾ニ、左右翼

ヲ張リテ圍ミ擊ツ、官兵殆ト敗レントス、指揮長官野津少將、自ラ彈丸ノ下ニ立チ、衆ヲ勵マシ奮戰ス、會、厚東少佐、第四大隊ヲ率ヰテ、既ニ中原ヨリ北山ニ沿フテ轉戰シ、行、賊兵ヲ破リ、第十大隊ノ急ヲ聞キ、突然賊ノ後背ニ出テ、急ニ之ヲ擊ツ、賊兵顧ミヲ驚キ、遂ニ敗走ス、兩隊齊シク進ミテ之ヲ尾擊ス、是時中村少尉、第四大隊ノ一小隊ヲ率ヰ、小慢津村ヨリ進ム、賊要地ヲ堅守シ、戰甚タ力ムルヲ以テ、利ヲ失ヒ退キテ寒水村ノ本隊ニ合ス、官軍既ニ寒水ノ戰ニ勝チ、將ニ勢ニ乘シテ

神埼ヲ襲ハントシ、進ミテ苫野村ニ至リ、兵ノ向フ所ノ部署ハ、第十大隊ノ二中隊ヲ本道ヨリ進マシメ、其一中隊ヲ分チテ、道ヲ左ニ取ラシム、第四大隊ノ一中隊ヲ、右シテ北山ニ沿ヒ進メシム、官道ノ前隊進ミテ吉田村ニ至ル、賊田手村ヲ扼シ、三方ヨリ齊シク銃砲ヲ發ス、官軍前隊ノ一中隊之ニ當ル、此地タル曠野遼濶、樹林叢植シ、賊又地理ニ熟スルヲ以テ出沒善ク戰フ、官兵乃チ地上ニ偃シ、溝渠ニ伏シ、以テ之ニ應ス、勝敗未ダ決セス、因リテ砲隊ニ令シ、我銃隊ヲ隔テ大砲四門

ヲ左右ヨリ亂發ス、砲丸銃隊ノ頭上ヲ過キテ、賊ノ正面ニ落ツ、賊顔ル披靡ス、既ニシテ左右ノ二中隊、前軍ノ戰酣ナルヲ聞キ、左右ヨリ突出シ、横ナマニ賊ノ両翼ヲ擊ツ、両軍ノ砲聲霹靂ノ如ク、鬨煙野ヲ蔽ヒ、殆ト人馬ヲ辨セサルニ至ル、是時青山大尉、一隊ヲ帥ヰテ田手川ヲ渡リ、急ニ賊ノ後背ヲ衝ク、賊兵終ニ支フル能ハス、潰散シテ神寄ニ走ル、第十大隊、直ニ進ミテ神寄ヲ攻ム、賊又神寄ヲ燒キ境原ニ走ル、天既ニ暮レタルヲ以テ、官軍退キテ苔野ニ陣ス、第十一大隊、午後四時、千栗ヲ發シ、中原ニ至リ休戰ス、苔野ノ戰急ナリト聞キ、和田大尉一中隊ヲ以テ、進ミテ賊軍ヲ横擊シ之ヲ破リ、亦退キテ目達原ニ陣ス、此戰、阿部大尉、兒玉大尉以下、死傷頗ル多シ、博多ノ本營ヲ轟木驛ニ移ス、大久保内務卿、隨從官吏ヲ帥キテ小隈津ニ至リ戰ヲ閲ス、是日東京ニ於テ、二品親王東伏見嘉彰ニ勅シテ、征討總督トシ、陸軍中將山縣有朋、海軍少將伊東祐磨ヲ以テ征討參軍トス、此日、東艦博多ヲ發シ、長崎ニ入ル

二十四日、連日ノ戰士卒困頓セルヲ以テ、此日休

戰、銳ヲ蓄フ、因リテ兩大隊、各一小隊ヲ出タシ、斥候トシテ神寄近傍ヲ巡邏ス、路賊ノ哨兵ニ遇フ、賊銃ヲ放フコト二三發、我兵應セス、土民ニ問フニ賊狀ヲ以テス、上武曰ク、連日ノ戰ニ、賊徒官軍ノ勇敢ヲ惶怖シ、昨日ノ戰、隊長鍋島市之丞戰死セシヲ以テ、氣勢大ニ沮ミ、而シテ賊魁江藤新平、昨日神寄ニ在リ、今既ニ遁亡セリト、是日、大久保内務卿、苫野ノ軍ニ來リ、士卒ヲ勞シ、酒肴ヲ賜ヒ、此日、第十一大隊、陣ヲ苫野ニ移シ、前山隊ハ中原ヲ發シ、目達原ニ陣ス、是ヨリ先キ、小笠原大尉

第十大隊ノ第三中隊ヲ率キテ、博多本陣ヲ守ル、佐賀官道ノ外、久保山・三瀬越ノ間道アルヲ以テ、議シテ曰ク、賊間道ヨリ來リ侵シテ福岡ヲ襲ヒ、我軍ノ後路ヲ絶タンモ、亦未タ測ル可カラスト、山田少將ノ指揮ヲ承ケ、斥兵ヲ出タシテ、諸間道ヲ探偵ス、二十一日、斥兵歸報ス、賊三瀬ヲ越ヘテ飯場村ニ至ルト、山田少將森中尉ヲシテ、一分隊ヲ以テ前軍トシ、金武嶺ヨリ飯場村ニ進マシム、至レハ賊已ニ退ク、翌二十三日、小笠原大尉、山田少將ノ令ヲ以テ、賊ノ衆寡ヲ測ラントスシ、兵若

千ヲ率キテ、三瀬嶺ニ至リ、賊兵山上ニ出没スルヲ見テ、官軍發砲ス、賊モ亦之ニ應ス、須臾ニシテ止ム、初メ福岡小倉両縣ノ士民ヲ召募シ、官軍ニ屬セシメ、二十四日、山田少將令シテ福岡縣貫屬六小隊ヲ飯塲村ニ發セシム、既ニシテ賊ノ襲フ所ト為リ、敗レテ金武村ニ走ル、

二十五日、官軍苦野ニアリ、此日亦休戦、三大隊ヲ各一中隊、砲隊ヲ一分隊ヲ神埼ニ出ダシ、斥候ヲ姉村ニ出ダス、途ニ賊朝倉尚武ノ密使ヲ捕フ、是時、賊皆退キテ佐賀城ニ保ス、而シテ尚武特ニ百餘人ヲ以テ北山ニアリ、軍議ヲ以テ使ヲ城中ニ遣シ、答書ヲ得テ歸レル者ナリ、是日、渡邊少佐比志島大尉、兵卒二三名ヲ率キテ、境原ノ近傍ニ至リ、賊狀ヲ探リ、賊ノ斥兵ニ遇フ、發銃二三丸、賊忽チ遁走ス、小笠原大尉ノ一中隊ハ内野ニ軍ス、而シテ福岡貫屬隊ハ飯塲村ニアリ、斥候ヲ所々ニ出シ、賊情ヲ探偵ス、

二十六日、休戦昨ノ如シ、斥候ヲ所々ニ出ダシ、賊ノ動静ヲ偵ス、明日ヲ以テ進擊セントコトヲ決シ、諸軍ヲ部署ス、是日、小笠原大尉ノ一中隊ヲ分チ

ス、背振山・久保山・板屋越ノ三道ニ向ハシメ、而シテ本隊ハ脇山ニアリ、以テ三道ノ應援ニ供ス、部署已ニ定マリ、黎明三道并ヒ進ム、賊背振山口ヲ扼守ス、官軍砲擊數刻、遂ニ賊ヲ走ラシテ背振山ヲ取ル、久保山・板屋越二道ノ軍ハ、山路嶮峻、行軍甚タ難キヲ以テ、要地ニ頓陣シ、斥兵ヲ出タシテ賊情ヲ探ラシメ、而シテ脇山ノ本隊ハ、進ミテ推原ニ軍ス、前數日、福岡本營、電報ヲ廣島鎮臺ニ發シ、出兵ヲ命ス、因リテ北海艦ヲ廣島ニ遣シ、之ヲ迎ヘシム、艦此日ヲ以テ廣島ニ至ル、此ニ於テ、同臺司令長官陸軍少將井田讓、陸軍少佐高島信茂、古川氏潔臺兵第十五大隊ノ第二第三中隊ヲ率ヰテ上艦シ午後五時抜錨ス、

二十七日、午前第六時全軍苫野ヲ發シ、神埼ニ至リ、第十大隊及ヒ砲隊ヲシテ、本道ヨリ姉村ニ向ハシメ、第四大隊ヲ以テ右翼トシ道ヲ仁比山ニ取リ、朝日村・城原山ヲ過キテ、川久保ニ向ハシメ、而シテ第十一大隊、及ヒ第十九大隊ノ一小隊ヲシテ、蓮池口ヨリ進入セシム、既ニシテ本道ノ軍、進ミテ姉村ニ至ル、賊神埼以南ノ諸橋梁ヲ撤シ、

官軍ノ進入ヲ絶ツ、乃チ急ニ之ヲ修架シ、進ミテ兵ヲ分配シ、賊ノ有無ヲ探ル、賊俄ニ林藪中ヨリ、急ニ官軍ヲ亂射ス、官軍之ニ應シ、銃砲并ヒ發ス、此地曠原平野、塹濠縱横、是ヲ以テ進退意ノ如クナラス、賊ハ地理ニ熟シ、要地ヲ占メ、拒守頗ル便ナリ、交戰數時、殺傷過當、官軍殊死シ戰ヒ、匍匐膝行シテ、且戰ヒ且進ム、賊三面ヨリ彈射シ、銃丸雨注、黑煙天ニ漲リ、日色晦冥、官軍殆ト將ニ敗レントス、會我砲隊發スル所ノ拓榴彈、屢賊ノ堡壘ニ中ル、賊之カ為ニ披靡ス、官軍勢ニ乘シテ猛進ス、

賊支ヘスシテ潰奔ス、官軍境原ヲ取ル、川久保ニ向フ所ノ第四大隊、北山ニ沿フテ進ム、賊ニ朝日村・城原山ノ間ニ遇フ、乃チ大隊ヲ三分シテ、三面合擊ス、賊走リテ野田村ヲ保チ、松林中ニ伏匿シテ迎ヘ戰フ、官軍右翼ノ中隊、其背ニ繞リ出テ、斜ニ賊ノ左翼ヲ突ク、賊驚キ走ル、官軍尾擊甚タ急ナリ、賊兵大ニ敗レテ、尽ク高保ニ走ル、官軍進ミテ總坐村・草葉村ノ畧取ス、日暮ニ會スルヲ以テ、全軍退キテ復川久保ニ陣ス、夜境原ニ轉軍シ、本道ノ軍ニ合シ、蓮池口ニ向フ所ノ官軍ハ、已ニ神

嵩ニ至リ、一軍ハ江見・六田ノ間ヲリ進ミテ境原ノ賊ヲ横撃シテ、之ヲ破リ、直ニ其地ニ軍シ、一軍ハ進ミテ蓮池ヲ突キ、賊ノ背後ニ出ツ、蓮池ノ賊兵迎ヘ戦フ、我兵一戦之ヲ敗リ、火ヲ放チテ境原ノ賊ヲ脅ス、賊煙ヲ顧ミテ驚キ走ル、因リテ使ヲ本道ニ馳セ、本陣ヲ蓮池ニ移サンコトヲ請フ、是時賊又返戦シテ境原ヲ侵シ、官軍頗ル苦シム、蓮池ノ官軍来リ救ヒ、夜ニ及ビテ、賊兵尽ク潰奔ス、黒夜伏アランコトヲ恐レ、復追ハス、止リテ境原ニ次ス、此驛兵燹ニ罹レルヲ以テ、全軍終夜露

営、風霜嚴肅ナリ、此日、諸道ノ官軍、晨ヨリ戰ヒ、薄暮ニ至リ未タ已マス、是ヲ役中第一ノ激戰トス、而シテ賊勢モ亦此ヨリ衰ヘ、推原ニ在ル所ノ第三中隊ハ、午前一時推原ヲ發シ、久保山嶺ニ向ヒ、先鋒將ニ山頂ニ達セントス、斥兵ヲ出メシ敵情ヲ探ラシム、斥兵歸リテ嶺上ニ賊アルノ報ス、乃チ一小隊左右翼ノ張リテ夾ミ擊ツ、賊拒キ戰フコト須臾ニシテ潰走ス、官軍追フテ嶺上ニ至レハ、天始メテ明ケメリ、背振山ニアル所ノ半隊ハ、午時賊久保山村ニ来レルヲ聞キ、隊ヲ分チ三線

トナシテ進ム、賊山間ニ伏シ、我左翼ヲ砲擊ス、三線隊ヲ合セ、左翼ニ向ヒ奮戰ス、賊兵敗走ス、官軍久保山嶺ニ至リ、本隊ニ合ス」福岡縣貫屬隊ハ、黎明金武ヲ發シ、三瀨嶺ノ賊ヲ擊ツ、終日苦戰、賊墨堅固ニシテ拔クコト能ハス、夜ニ入リ兵ヲ益シ、急ニ賊ノ虛ヲ襲ハ、賊乃チ嶮ヲ棄テ、走ル」是日、天皇詔シテ太政大臣、征討總督、并ニ征討參軍、陸軍大輔、近衛聯隊長ヲ召シ、第二聯隊長、及ヒ其大隊長ニ諭シテ曰ク、佐賀縣ノ賊徒ヲ征討トシテ、特ニ總督ニ假スニ、朕カ親軍近衛第二聯隊ヲ以

テシ、朕カ黎元ヲ保護スルノ意極メテ切ナルヲ明ニス、汝等能ク斯旨ヲ體シ、奮發從事速ニ平定ノ功ヲ奏セヨ、第一聯隊長、及ヒ其大隊長ニ諭シテ曰ク、佐賀縣ノ賊徒ヲ征討トシテ、特ニ總督ニ假スニ、朕カ親軍近衛第二聯隊ヲ以テシテ、之ニ赴カシム、輦轂ノ下モ亦守衛一層能ク心ヲ用ヰ、勉勵從事スヘシ」是日、北海艦三田尻ニ至リ援鎗ス、山口分屯ノ第一中隊、亦上艦ス、陸軍中佐田中春風等之ヲ率ヰ、午後十一時、博多港ニ入ル、并田少將、士官數名ヲ率ヰ上陸シ、福岡ニ至リ、隊兵

ハ猶ホ繼中ニ留マラレシヘ、

二十八日、午前七時、賊木原隆忠、兵器ヲ脱シ、白旗ヲ標シ、衆ニ代リテ境原ノ軍門ニ来ル、乃チ兵ヲ整列シ、隆忠ヲ本営ニ召シ、渡邊少佐、東郷大尉、之ニ接ス、隆忠一封ノ歎願書ヲ出ダス、書中言フ所頗ル暴慢不遜ニ渉ル、故ヲ以テ其天兵ニ抗スルヲ責メ、且曰ク、速ニ悔悟謝罪ノ實ヲ徴セヨ、然ラサレハ、直ニ軍ヲ進メ追討セント、書ヲ卻ケ、隆忠ヲシテ還ラシム、隆忠悲哀頻ニ戰ヲ止メンコトヲ乞ス、乃チ令シテ曰ク、然ラハ則チ午後三時ヲ

期シ、兵器ヲ收メ、降伏謝罪ノ實ヲ舉ケヨト、從者ヲ拘留シ、隆忠ヲ放チ歸シ、軍ヲ進メテ蓮池ニ至ル、第十大隊殿タリ、以テ賊ノ襲擊ニ備フ、午後第二時、隆忠賊副島義高ト俱ニ蓮池ノ軍門ニ来ル、書ヲ出ダスコト前ノ如シ、而シテ書辭猶不遜ニ渉ル、因リテ責メテ曰ク、謝罪ノ效果シテ安ニ在ルト、義高謝シテ曰ク、吾輩此舉ノ魁首タリ、書辭ヲ改ムル、衆議ヲ待タス、願ハクハ其辭ヲ教ヘテレヨト、乃チ又之ヲ責メテ曰ク、謝書ヲ書スルニ、未タ教ヲ請フ者アルヲ聞カス、汝多言スル勿レ、

命スル所汝カ本意ニ適セスハ、必スシモ曲從シテ書スルヲ須ヒス、直ニ兵ヲ以テ罪ヲ問ハント、義高語塞ル、因リテ義高ヲ逐ヒ、隆忠ヲ擒ニス、夜ニ及ヒテ、義高一封ノ書ヲ呈送ス、其書ニ曰ク、官軍ニ抗スルノ文字、本意ニ背クヲ以テ、之ヲ筆スルコト能ハス、願ハクハ本營ニ至リ、大久保内務卿ニ謁シ、心腹ヲ陳シ罪ヲ乞ハント、野津少將書ヲ以テ答ヘテ曰ク、汝輩決シテ本營ニ至ルノ理ナシ、降ヲ軍門ニ乞フノ外、毫モ聽用スヘカラス、明日午前十時ヲ限リ、謝罪ノ實ヲ致セ、然ラスハ

速ニ王師ヲ加ヘント、將校ヲ會シ、進討ノ策ヲ議ス、而シテ大久保内務卿モ亦蓮池ノ營ニ至ル、是日早晨、井田少將、山田少將ト議シ、午前七時、廣島鎮臺兵ヲ上陸セシメ、之ヲ福岡城ニ入ル、井田少將地理ノ嶮夷ヲ察セント、尉官數名ヲ率キテ、正午十二時福岡ヲ發シ、三瀬口ニ至リ、其第一第三中隊ヲ、午後二時福岡ヲ發シ、三瀬口ニ進ム、高島少佐、古川少佐、其第二中隊ヲ率サテ推原口ニ向ヒ、以テ小笠原大尉ノ應援ヲ為ス、三瀬口ニ進メル兩中隊、既ニ三瀬嶺ニ至ル、井田少將馳セテ嶺

ニ至リ、即チ諸隊ヲ布置シ各要衝ニ備フ、福岡縣貫屬隊、前日ノ戰此地ヲ取リ、加藤某森某、三小隊ヲ以テ之ヲ守リ、未タ進取スル能ハス、因リテ亦之ヲ要衝ノ地ニ置キ、哨兵ヲ嚴ニシ、以テ敵ノ襲擊ニ備ヘ、此地ヲ距ルコト西北一里餘、水無嶺アリ、亦福岡縣貫屬隊三小隊ヲ以テ之ヲ守ル、田中中佐、陸軍大尉河野通好ヲ遣シテ令ヲ傳ヘ、明晨ヲ以テ大瀬村ヨリ進ミ、三瀬村ノ賊ヲ擊タシム、夜風雨甚シク、兵士露立シテ雨肌ニ透ル、椎原口ニ向ヘルノ一隊、未タ福岡ヲ發セス、高島少佐、古

川少佐、及ヒ大尉三戸頼武、先ヲ發シテ椎原村ニ至リ、直ニ久保山ノ絶頂ニ登リ、地形ヲ觀ル、此時ニ當リ、矢筈嶺・鬼ケ鼻・背振山等ノ險隘、悉ク官軍ノ有スル所トナリ、而シテ賊猶久保山村ニ屯スルノ報アリ、即チ小笠原大尉ヲシテ、其中隊ヲ率ヰテ之ヲ擊タシム、至レハ則チ賊既ニ遁ル、高島少佐等、椎原村ニ還ル、第二中隊、午後二時福岡ヲ發シ、第十時椎原ニ至ル、風雨晦冥、我軍地理ニ熟セサルヲ以テ、椎原村ニ次ス、此日、海軍兵、及ヒ長崎縣ノ貫屬隊、大村口ヨリ長驅シテ佐賀城ニ

入ル、是ヨリ先キ、海兵長嵩ニ駐ルコト數日、官軍神崎ニ進ムニ及ヒテ、海兵及ヒ長嵩ノ貫屬隊ニ令シテ、大村口ヨリ佐賀城ニ入ラシム、因リテ前三日、遠武秘書官海軍兵ノ率ヰ、山口縣士族河内直方、長嵩貫屬隊ヲ率ヰ、長嵩ヲ發ス、此日、大町驛ニ至ル、沼道ノ賊、降ヲ乞ヲ者陸續相踵ク、牛津ニ至ル、賊將ニ橋梁ヲ絶タントス、斥兵擊イテ之ヲ走ラス、進ミテ賀瀬ニ至ル、賊村山長英、來リテ謝罪表ヲ遠武秘書官ニ上リ曰ク、王師ニ抗スル、素ヨリ本意ニ非ス、而シテ事遂ニ此ニ至ル、且開ク

島津從二位公、勅ヲ奉シテ九州ヲ鎮撫スト、恐懼ノ至リニ堪ヘス、伏シテ願ハクハ非常ノ寛典ヲ以テ、戰ヲ止ムルコトヲ許サルレハ、衆ヲ諭シ降ヲ乞ヒ、罪ヲ謝セント、遠武秘書官答ヘテ曰ク、汝等先ツ降ヲ乞ヒ、然ル後チ戰ヲ休メヽ然ラサレハ、汝ヲ乞ヲ許サスト、長英曰ク、謹テ命ヲ聽ケリ、請ヲ還リテ衆議ヲ決シ、午後六時ヲ期シテ至ラントト、因リテ之ヲ還ス、是ニ於テ、軍ヲ駐メテ報ヲ待ツ、期ニ及ヒテ報ナシ、乃チ進ミテ佐賀城下ニ至ル、賊兵狼狽潰散、復戰ヲ敢ハス、我軍皆佐賀城

ニ入ル、

三月一日、期ヲ過ギテ副島等ノ報至ラス、即チ全軍ヲ分チテ、本道及ヒ蓮池ヨリ、両道并ヒ進ム、路ニ隻賊ナシ、因リテ佐賀城ニ入リ、城外ノ宗龍寺ヲ以テ本営トス、大久保内務卿、山田少将河野権大判事等ヲ帥サテ、之ニ入ル、賊ノ暴挙ヨリ此ニ至ルマテ、僅ニ十四日、而シテ官軍死傷、合セテ三百五十八人、賊徒ノ死傷セル者、三百二十三人ナリト云ヘリ、嚮ニ西島少尉以下賊ニ縛セラレ、獄中ニ禁閉セラル、賊ノ敗潰スル、之ヲ棄テ、去ル、

官軍城ニ入ルニ及ヒテ、少尉以下皆帰ル、乃チ佐賀縣ニ令シテ曰ク、賊平ク、士民各其堵ニ安セヨ、但賊魁江藤新平等、逃亡シテ其所在ヲ知ラス、若シ其潜伏セル所ヲ知ル者アラハ、速ニ官ニ告ケヨ、知リテ告ケサル者ハ、必ス之ヲ罪セント、是ニ於テ、大坂以西ノ諸縣ニ令シ、厳ニ脱賊ヲ捜索セシム、井田少将第一第三両中隊ヲ率キ、午前六時、霧雨ニ乗シテ、三瀬村ニ至レハ、賊既ニ遁レヲ踪跡テ見ス、乃チ三瀬村ニ陣シテ休憩ス、水無嶺ニ向ヘル所ノ田中中佐、福岡縣貫属隊ヲ率キ、本軍

ニ来リ合ス」高島少佐ハ、黎明、第二中隊ヲ率ヰテ
推原ノ發シ、久保山ニ向フ、此山、南北肥筑ニ界シ、
左右絶壁、嶮路崎嶇、全隊雨ヲ衝キ嶮ヲ冒シテ進
ム、午前八時久保山ニ至レハ、復隻賊ヲ見ス、午後
六時腹巻村ニ至リ頓陣ス」是日、陸軍大佐谷重喜、
大坂鎮臺歩兵第十八大隊、砲兵第七大隊ノ一小
隊ヲ率ヰテ福岡ニ至リ、三瀬口ニ進ムコトヲ久
保山村ノ軍ニ報ス、井田少将答ヘテ曰ク、此地賊
已ニ奔散シ、復援兵ヲ須ヒス、宜シク本道ヨリ進
ムヘシ」是日征討總督東伏見嘉彰、東京ヲ發ス、

勅シテ曰ク、朕曩ニ佐賀縣下士民嘯集ヲ聞キ、内
務卿大久保利通等ヲ遣シ、之ヲ鎮靜セシメント
ス、然ルニ、兇頑ノ徒、益暴逆ヲ逞シクシ、擅ニ凶器
ヲ弄シ、遂ニ王師ニ抗スルニ至ル、其罪討セサル
可カラス、乃チ卿ヲ以テ征討總督ニ任シ、委スル
ニ陸海軍務一切、并ニ將官以下撰任黜陟等ノ事
ヲ以テス、名古屋以西、四鎮ノ兵馬、現役後備ヲ論
セス、舉ケテ以テ卿カ區處ニ聽カス、沿道諸縣ノ
士民召募編制モ、亦宜シク便宜事ニ從フヘシ、且
朕カ近衛歩兵二大隊ヲ假シ、以テ朕カ黎元ヲ保

議スルノ意極メテ切ナルヲ明ニス、其レ斯旨ノ體シ、速ニ捷ヲ闕下ニ奏セヨト、又征討參軍山縣有朋ニ勅シテ曰ク、佐賀縣賊徒征討ノ事ニ由リ、二品親王東伏見嘉彰ヲ以テ征討総督ニ任シ、委スルニ陸海軍務一切ノ區畫、并ニ將官以下撰任黜陟等ノ權ヲ以テシ、汝有朋ニ參軍ヲ命ス、其レ能ク帷幕ノ機謀ニ參シ、凡ソ陸軍ニ關スルノ事ハ、篤ク総督ヲ輔翼シ、速ニ成功ヲ奏セヨト、又征討參軍伊東祐麿ニ勅シテ曰ク、佐賀縣賊徒征討ノ事ニ由リ、二品親王東伏見嘉彰ヲ以テ征討総督ニ任シ委スルニ陸海軍務一切ノ區畫、并ニ將官以下撰任黜陟等ノ權ヲ以テシ、汝祐麿ニ參軍ヲ命ス、其レ能ク帷幕ノ機謀ニ參シ、凡ソ海軍ニ關スルノ事ハ、篤ク總督ヲ輔翼シ、速ニ成功ヲ奏セヨト、是ニ於テ、総督、參軍・參謀官・并ニ附屬諸官及ヒ近衛二大隊ヲ率サテ、東京ヲ發シ、龍驤艦ニ横濱港ニ乘ル、

二日、午後四時、高島少佐第二中隊ヲ率サテ、軍ヲ川久保村ニ進メ、小笠原大尉ニ會シ、佐賀ノ既ニ平定セルヲ聞キ、川久保・久保山ニ進ム、呼ノ福岡

縣貫屬隊ニ令シテ、歸陣セシメ、午後四時佐賀ニ入ル、小笠原大尉、其他偵探ノ兵、皆前後佐賀ニ至ル、井田少將、福岡縣貫屬隊ヲシテ、福岡ニ歸ラシメ、自ラ二中隊ヲ率ヰテ、三瀬村ヲ發シ、三多田ヲ經テ川上村ニ向フ、亦途ニ隻賊ヲ見ス、即チ川上村ニ次ク、是日、谷大佐ニ令シテ其率ヰル所ノ大坂鎮臺歩兵一大隊、砲兵一小隊ヲ大坂ニ班ヘサシム、

三日、午前十一時、井田少將、二中隊ヲ率ヰテ佐賀ニ至リ、第二中隊ト合ス、陸軍少將谷干城、熊本鎮臺ヨリ佐賀ニ至ル、午後三時、井田少將廣島鎮臺兵ヲ率ヰテ、佐賀ヲ發ス、是時ニ當リ、征討總督ハ、神戸港ニ至リ、未タ發セス、乃チ遥ニ勅シテ曰ク、佐賀既ニ平定セリ、宜シク縣地ニ赴キ、軍事ヲシテ條緒ニ就カシムヘシ、而シテ率ヰル所ノ近衛兵二大隊ハ、叅軍山縣有朋ヲシテ、率ヰテ歸京セシムヘシト、是日、佐賀縣ニ令ス、平民賊ノ脅從ニ係ル者、一切其罪ヲ宥ムト、而シテ人ヲ鹿兒島・白川兩縣、及ヒ南海道等ニ分派シ、賊跡ヲ搜索セシム、此日令シテ福岡貫屬隊ヲ解カシム、

四日、野津少將、大坂鎮臺歩兵第四第十兩大隊、第三砲隊ヲ率ヰ、佐賀ヲ發シテ福岡ニ歸リ、熊本鎮臺第十一大隊ヲ留メテ、佐賀ヲ衛ラシム、

五日、是ヨリ先キ、遠武秘書官、肥薩沿海ヲ巡リ、賊ノ奪取スル所ノ舞鶴船ヲ搜索ス、是日薩ノ阿久根港ニ於テ之ヲ讓タリ、然レ𪜈、賊既ニ遁去シ、船中聞トシテ人ナシ、是日、野津少將ヲ以テ、征討總督參謀長トス

六日、征討總督、幕下諸官吏ヲ率ヰテ神戸港ヲ發ス、此日、井田少將、廣島鎮臺兵ヲ率ヰテ北海艦ニ乘リ、午後十一時、艦博多港ヲ發ス、

七日、北海艦三田尻港ニ至ル、井田少將、上陸シテ山口縣ニ赴キ、而シテ其率ヰル所ノ第一中隊ヲシテ、山口營所ニ凱歸セシム、野津少將福岡ニ至リ、戰死ノ靈ヲ祭ル、是日、熊本鎮臺第十九大隊ヲ發シ、第十一大隊ト交代セシム、

八日、北海艦廣島ニ達ス、臺兵上陸、鎮臺ニ凱旋ス、嚮ニ高松營所ノ一中隊ヲ派シテ、本臺ヲ守ラシム、此ニ至リテ、復高松ニ歸ラシム、是日、侍從番長高島鞆之助、勅ヲ奉シテ東京ヨリ至リ、大久保内

務御、山田少將、野津少將、岩村權令、及ヒ兵隊ニ、酒饌ヲ賜ヒ、軍勞ヲ慰ス、此日、林海軍大佐以下海軍兵ニ命シテ、東京ニ歸ラシム、

九日、午後五時龍驤艦博多港ニ入リ錨ヲ投ス、總督、伊東海軍少將等ヲ率ヰテ上陸ス、野津少將、其率ヰル所ノ歩兵二大隊ヲ以テ奉迎シ、福岡城ニ入リ、以テ本營トス、

十日總督福岡ニアリ、其陸軍病院ニ臨ミ、瘡痍ヲ問ヒ、箱崎ニ至リ、戰死ノ靈ヲ吊シ、歸リテ士官兵卒ニ酒饌ヲ賜フ、是日、本月七日以來脱賊島義勇

副島義高以下十六人ヲ、鹿兒島縣下ニ捕ヘメタリトノ報アリ、

十一日、大坂艦海軍兵ヲ乘ヲ、長崎ノ發ス、

十二日午前七時、總督福岡ヲ發シ佐賀ニ向フ、歩兵一中隊ヲシテ警衛セシム、原大尉之ヲ率ヰメリ、野津少將ヲシテ熊本ニ赴カシム、

十三日、野津少將、福岡ニアル歩砲三小隊ヲ率ヰテ、福岡ヲ發シ熊本ニ向フ、

十四日總督佐賀ニ入ル、陸軍中佐高柳邦秀、佐賀縣權令岩村高俊、及ヒ佐賀留屯ノ熊本鎮臺兵二

中隊総督ヲ新宿ニ奉迎ス、午後一時佐賀ニ至ル、其士族鍋島直高ノ家ヲ以テ本營トス、是ニ於テ、大久保内務卿、一切ノ軍務ヲ奉致ス、

十五日、總督佐賀ニアリ、城内戰地ヲ巡視ス、

十七日、前山精一郎、賊徒嘯集ノ初ヨリ、確然大義ヲ唱ヘ、官軍ニ屬シ、終始勉勵セルヲ以テ、本營ニ於テ酒肴料ヲ賜フ、

十九日、野津少將、其率ヰル所ノ兵ノ以テ、熊本鎮臺ニ至ル、

二十二日、總督將ニ熊本ニ赴カントス、午前七時佐賀ヲ發シ、三潴縣ニ至ル

二十三日、總督三潴縣ニアリ、其陸軍病院ニ臨ミ、戰死ノ靈ヲ吊スルコト、福岡縣ノ例ノ如シ、

二十七日、午後四時、總督熊本ニ至ル、是日、野津少將、中村中佐、渡邊少佐等、總督ノ植木驛ニ迎ヘ、熊本鎮臺兵、及ヒ留屯大坂鎮臺兵、路ニ艦列シテ奉迎ス、其本營ニ入ルニ及ヒテ、祝砲ヲ發スル二十一聲、是日、山縣中將、征討參軍ヲ免セラル

四月一日、總督熊本鎮臺ニ臨ミ、士官以下征討ニ關スル者ニ酒饌料ヲ賜ヒ、瘡痍ノ者ニ、藁料ヲ賜

人、是日、高知縣ヨリ報至ル、曰ク、三月二十四日、賊香月敬五郎以下六人ヲ捕ヘタリト、

二日、總督參謀官以下ヲ率ヰ、小嶺原ニ於テ熊本現在全兵ノ練兵ヲ觀ル、是日、電報兵庫ヨリ至ル、曰ク、三月二十九日、賊魁江藤新平、江口村吉及ビ新平ノ僕船田次郎等ヲ、高知縣下甲浦ニ於テ捕縛スト、

四日二品親王東伏見嘉彰、征討總督ヲ免セラレ、更ニ委任スルニ賊徒處刑ノ事ヲ以テス、大久保内務卿ヲシテ、其指令ヲ承ケテ處分セシム、野津少將參謀長ヲ免セラレ、伊東少將參軍ヲ免セラル、

八日、鹿兒島縣ヨリ報至ル、曰ク、賊山田平蔵、牛島太郎、松永權次郎、生田源八、水月六日、縣廳ニ自首シテ縛ニ就クト、

九日、是時脱賊概ネ縛ニ就キ、前後佐賀ニ押送セラル、河野權大判事斷獄ヲ掌リ、鞫問畧備ハルヲ以テ、處刑擬律ヲ制シ、大久保内務卿ニ呈ス、内務卿決ヲ二品親王ニ取ル、是日、長崎小倉二縣ノ貫屬隊ヲシテ、解隊歸縣セシム、

十二日、賊ノ罪狀悉ク定マリ、爰書拇印ノ事已ニ終ル、

十三日、賊罪ヲ斷ス、刑場ヲ佐賀城中ニ設ケ、午前六時、江藤新平、島義勇ヲ梟示シ、副島義高、村山長英、福地常彰、重松基吉、中川義純、山中一郎、中島鼎藏、朝倉尚武、西義質、香月敬五郎ヲ斬ニ處ス、此ニ於テ二品親王、餘賊處刑ノ事ヲ以テ、大久保内務卿ニ委シ、午前一時、猶龍艦ニ乘リ長崎ニ赴ク、

十三日、前山隊ニ命シテ解隊セシム、

十七日、賊山田平藏、縛ニ就クコト最後ルヽヲ以テ、此日斬ニ處ス、賊徒前後刑ニ處スル者、梟首二人、斬首十一人、懲役百三十九人、除族二百三十三人、禁錮七人、免罪一萬零六百五十九人、總計一萬一千零五十一人ナリ、事既ニ終ハル、大久保内務卿乃チ博多ニ至ル、内務大丞渡邊清等、留マリテ後事ヲ整理ス、

十八日、大久保内務卿、及ヒ各官、光運船ニ乘リテ、博多港ヲ發ス、

十九日、光運船神戸港ニ入ル、

二十一日、二品親王龍驤艦ニ乘リ、神戸港ニ入ル、

大久保内務卿、龍驤艦ニ移リテ、二品親王ニ陪シ、
神戸港ヲ發ス、
二十四日、龍驤艦横濱港ニ入ル、二品親王東伏見
嘉彰、内務卿大久保利通、即日歸京、上表シテ賊徒
平定ノ顛末ヲ闕下ニ奏ス、内務卿東京ヲ發ヤシ
ヨリ、此ニ至ルマテ七十日、而シテ二品親王征討
總督トシテ闕ヲ辭セシヨリ、五十有五日ニシテ、
西國悉ク平ケリ、

佐賀征討戰記畢

死傷錄

二月十六日戰死

熊本鎮臺第十一大隊

大尉大池蠖二　軍曹米田素次郎　伍長秋澤輕吉　兵卒糸井　保

同傷

熊本鎮臺第十一大隊

参謀少佐山川　浩　大尉奥　保鞏　軍曹石原矢之助　兵卒山口久三

同　檜垣信雄

同月十八日戰死

熊本鎮臺第十一大隊

中尉澤田正武　同津井城卿吉　曹長石嵜左久馬　同　溝部　桑
軍曹板垣信泰　同　岡山誠作　同　百島孝至　同松尾勝太郎
同　藤井　茂　同　藤井敬一　同　秋友　真　同山本清太郎
同　藤村孝忠　同渡邊新太郎　伍長佐久間一郎　同　小野清彦
同　小林真直　同　大島郡造　同守田源三郎　同　天野経輝
同　柴田正時　同　足立臺助　同・中根男也　同　木村彦作
同　峯　壯七　同　村田源藏　靴工伍長樫部範一　伍長勤務河野宇一
同　植田鎮定　同　後藤加納　同　財津義龍　喇叭卒河手音之進
同　伊川伴藏　同　八田義貞　同井上七太郎　同白石元次郎
兵卒江藤温故　同　佐藤信助　同　浦上千槌　同　太田舜吾

同　原　正勝　同　澄田莊藏　同宮原兵太郎　同　村上多作
同　並原全二　同月木七兵衛　同　永野幸一　同　金谷　邊
同釋迦郡武平　同　中島勝馬　同北島喜太郎　同三宅良太郎
同　池田十郎　同岡田岩五郎　同坂口直右衛門　同　木村銓松
同松岡文次郎　同隈元卿右衛門　同種子田平内　同石塚源次郎
同　佐藤益松　同　秦野多平　同川畑正右衛門　同　中原英助
同　木下智親　同　守屋春光　同　野村半一　同　馬場小吉
同　有馬丈一　同　久保佐助　同　藤山榮吉　同　本間精一
同　三箇重貞　同　石原徳男　同　村松安順　同　佐野正夫
同　津江為安　同長谷川吉藏　同　坂本平八　同塚本半四郎

同内田暖太郎　同　檜垣信雄　同久保田又一　同山嵜斧太郎
同　永友安行　同瀨戸口藤次郎　同　甲斐友雄　同重松儀三郎
同關屋仲八郎　同酒瀨川彦七　同　鬼頭義温　同　石川正男
同熊谷保次郎　同　髙木　崩　同　大山　昌　同小谷彪太郎
同　森　五市　同　藤井信友　同　萩野　一　同　塚田彦治
同　河合政登　同鹿野市次郎　同佐久間磯七　同　川嵜榮一
同　奥村亭太　同谷野松三郎　同伊藤房之助　同　松田　保
同柏木六郎太　同　藤野又平　同田坂音次郎　同田中千代太郎
同鬼丸八之助　同上田亀太郎　同江里口彌太郎　同豊丸仲之進
同泊喜左衛門　同　久野正親　同　有弘　潮　同永田又次郎
同令給梨平藏　同　堀　源造　同　税所伊助　同三浦小四郎
同　浦川重藏　同丸山吉太郎　同柴田茂一郎
十二等出仕　伊藤盛康　軍屬　若松平八　同　田齊惠八　同　髙山甚藏
同　平川梅吉　大池大尉従者　野村文藏　安芸大尉従者　伊藤新治　山脇大尉従者　木村　操
中島中尉従者　柴田權四郎　西島中尉従者　坂田熊吉
同傷
隊外大尉　安田宗直

熊本鎮臺第十一大隊

軍曹　志賀岐敬三郎　同　太田早瀨　同　堀田整藏　伍長　原　延齡
兵卒　榎本龍益　同　濱田傳八　同　田頭森貞　同令給梨佐之助

後死 同中村忠次郎　同　瀨尾傳介　同　近藤守人　同濱田傳太郎
同坂本市五郎　同山本善三郎　同　岩下　求　同　東島敬忠
同　後藤末吉　同伊藤政一郎　同住田峯之助　同　萩原藤平
同　日高吾島　同中島良之助　列外小使 篠田元次郎

同月二十二日戰死

熊本鎮臺第十一大隊

中尉永山貞應　少尉本田宗七　伍長和田金平　同　間　繁光
同　高須諒三　兵卒石井市藏　同　森　眞卿　同　阿部道志
同佐々木滿政　同　上田藤平　同森嵜國三郎　同吉原熊太郎
同　藤井義明

大坂鎮臺第四大隊

曹長江口照秀　喇叭卒大野正一

同傷

熊本鎮臺第十一大隊

軍曹佐々木歲貞　同坪井大五郎　同小野田藤次郎　伍長田上　登
同藤嵜久太夫　同　水場敬助　同高橋小十郎　兵卒輝　龜次
同　手塚彦次　同　山根光雄　同　田村信道　同　井上讃二
同小川吉太郎　同　清高民六　同　榎並善作　同　藤井直吉
同別府宗太郎　同　篠田直次　同武石伊十郎　同　上田文吉
同末野勇右衛門　喇叭卒山村注一郎

熊本鎮臺第十九大隊

少尉五島顯忠　兵卒重村善太郎

大坂鎮臺第四大隊

軍曹山本瀧藏　同其山健三郎　兵卒矢歌專造　同　岸川金房

同　角田義定　同　千羽政吉　同大髙晋次郎　同　齊田光知

同　田庶正一　同　大橋鐵太　同　角淵恒直　同細目捨三郎

同　大澤愛次　同天見松次郎　同越倉金太郎　同髙橋政太郎

大坂鎮臺第十大隊

兵卒串田嘉吉　同喜多尾明德　同　辻　安吉　同　中原庄平

同野村亀太郎

同月二十三日戰死

大坂鎮臺第四大隊

伍長神田又一郎　同　平田忠順　同　原田藤馬　兵卒髙尾常次郎

同来村彌八郎　同佐野仁三郎　同　堀　久松　同　山田竹治

大坂鎮臺第十大隊

大尉阿部正通　伍長竹内善三郎　兵卒小池彌吉　同　田中竹藏

同　越留次郎　同　秋本政男　同　山本信志　同小林儀三郎

東京鎮臺第三砲隊

伍長山田信治

同傷

熊本鎮臺第十一大隊

兵卒尾上義幸　同　田川若松

大坂鎮臺第四大隊

大尉兒島源太郎　少尉佐木養次郎　同　松田憲信　軍曹塩津信利

伍長佐野信次　同　神山鋳吉　同香取直三郎　兵卒太田定政

同　須田源吾　同　大橋鐵太　同木下喜代造　同　竹村一定

同水島藤次郎　同　植松政吉　同横田作太郎　同　井本三郎

同　齊藤俊治　同　木船久二　同　山村久孝　同田中安次郎

同　千羽政吉

大坂鎮臺第十大隊

大尉石川敬儀　少尉月岡才藏　軍曹山本正當　伍長久世新之助

兵卒濱野音松　同高桑彌八郎　同　松岡有興　同　熊本常吉

同　柴田房俊　同　乾　忠七　同　副田朔二　同久保田由若

同　山嵜榮朔　同　吉田盛藏　同　林　金吾　同越田小三郎

同嵜山市之助　夫卒三人

近衛隊付中尉小林敬一　隊外少尉伊澤　滿

同月二十七日戰死

大坂鎮臺第十大隊

伍長森嵜重造　伍長小林馬吉　兵卒寺中加藤次　同　三明景通

熊本鎮臺第十一大隊

兵卒岩嵜房次郎　同藤田榮太郎

熊本鎮臺第十九大隊

中尉竹垣和義　兵卒中西源七郎　同　野口恒吉　夫卒二人

同傷

大坂鎮臺第四大隊

軍曹林田廣衛　同　神戸　雷

大坂鎮臺第十大隊

大尉青山　朗　曹長栗屋才次　軍曹大内政弘　同　須佐為助

同　阿部冨知　伍長安藤傳三郎　同　白石春見　同　渡邊英司

同　大島數太　同　大野一之　同　稲垣正準　同　山嵜勝次

兵卒山口賢之進　同石橋吉太郎　同　宇野廣藏　同坂本市五郎

同　大西治以　同　中房健男　同　平山恒造　同神前民五郎

同　内藤　實　同　辻井直勝　同　小倉廣達　同長竹外次郎

同　東　萬作　同　玉堀岩吉　同　羽田榮喜　同　御收師興

同　林　茂平　同　高橋傳藏　同　目黒　豊　同　南部啓莊

同　池田虎吉　同小竹喜三郎　同　小山　登　同　黒田忠一

熊本鎮臺第十一大隊

大尉山脇錆太郎　軍曹川上助七　軍曹勤務大倉又廣　伍長佐藤八代吉

伍長勤務武居勝馬　兵卒燒山熊三郎　同岡冨嘉太郎　同　田部定康

同遠藤東四郎　同　兼田成綱　同　吉永甚助

熊本鎮臺第十九大隊

軍曹原田守典　同　筒井滋廣　伍長石丸定知　兵卒横田芳徳

同山尾九十九　同　三宅範人

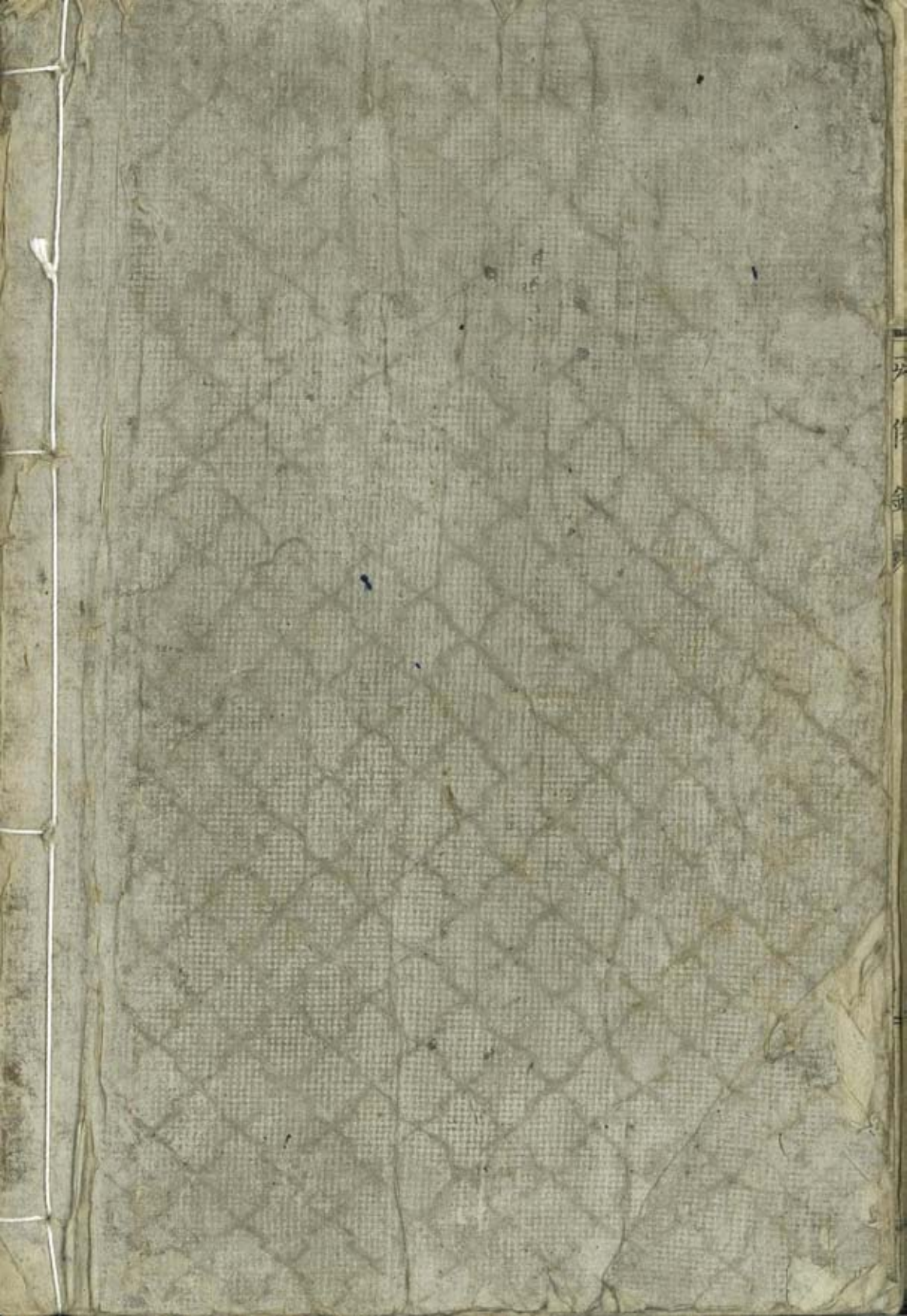
死　百八十四名

傷　百七十四名

總計　三百五十八名

死傷錄畢

18-10410



戰地略圖
肥
前
筑
後
藤津郡
彼杵郡
高来郡
杵島郡
佐賀郡
三潴郡
三池郡
山門郡
上妻郡
下妻郡
山本郡
竹野郡
生葉郡
小城郡
神崎郡
基肄郡
夜須郡
御笠郡
早良郡
怡土郡
志摩郡
糟屋郡
穂波郡
鞍手郡
嘉麻郡
上座郡
下座郡
御井郡
御原郡
玉名郡
託摩郡
齋藤知三寫